

マスターズを彩るレジェンドたち(5)

清涼の季節の9月。天高く馬肥えゆる秋の候だが、マスターズ陸上界は新型コロナウイルスの流行が収まらず、相変わらずの開店休業の状態だ。マスターズの会員さんたちは手ぐすね引いて、大会を待ちわびているはず。初秋とはいえ残暑に気をつけて、工夫しながらの体づくりを。今月号もレジェンドの続編。

写真／日本マスターズ連合

信条の「ロマン」を掲げ
M85で新記録に挑んだ
木村喜三さん(群馬)

赤い文字で「ロマン」と書かれた白いハチマキをきりと締め、走って、跳んでいた木村喜三さん(群馬)。トレードマークのハチマキの文字は、木村さんの信条である「青春、青春ですよ。そこにはロマンがある」。

木村さんはアメリカの実業家で詩人、サミュエル・ウルマンの言葉の一節を信条としているのだ。その一節とは「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。たくましい意志、豊かな想像力、燃える情熱を指す。時には20歳の青年より、60歳の人に青春がある。年を重ねるだけで、人は老いない。理想を失うとき、初めて老いる」である。

スーパーぶりを発揮したのはM85クラスにおいて。1996(平成8)年9月に富山市であった第17回全日本マスターズを一例にとると、出場3種目で世界新の快挙を打ち立てたのだ。走高跳で1m18を超え、1m13の世界記録を破ったのを皮切りに、走幅跳、三段跳でも世界記録を上回った。

走幅跳は3m23を跳んで、3m19の世界記録を更新。最後を締めくくった三段跳は7m18で、6m93の世界記録を書き替えた。この年の全日本マスターズは世界新5、日本新66、同タイ2、大会新119、同タイ7と記録ラッシュとなったが、木村さんは突出した活躍が認められ、MVP(織田賞)を射止めた。

木村さんは第17回大会が始まる前

の7月11日に85歳になり、マスターズ大会のM85クラス80mHで18秒03と、20秒30の世界記録を更新した。また、走幅跳では全日本マスターズでの記録より上の3m51をマークしたり、200mで35秒82の力走をし、こちらも35秒99の世界記録を破った。まだある。走高跳で全日本大会の1m18より下回ったが、1m15と再度の世界新を。

復活2年目は体力づくり
世界マスターズで3種目入賞

木村さんがマスターズを知ったのは81歳のとき。幼い頃は虚弱児だった。が、スポーツをするようになり、母親の食事面での気配りもあって、丈夫な体になった。明大に進学して「陸上を」と張り切ったまでは良かったが、脚の故障でリタイアを余儀なくされた。

「残念でした。そのときの無念さは本人しか分からない」。マスターズと出会い、65年ぶりにカムバックしたが、長かったブランクの上、張り切り過ぎ

て故障続きに。そこで復活2年目は体力づくりに励んだ。

83歳のとき走高跳で1m22の日本新を出して以降、次第にクラス別の記録を伸ばしていく。1993年の秋、宮崎市を中心に行われた第10回世界マスターズでは、M80・100m16秒53で7位。走幅跳3m35の5位、三段跳7m64で6位と3種目入賞を果たした。

2年後の1995年に米国バッファローであった第11回世界マスターズでは棒高跳1m70で2位。84歳とM80には不利な年齢だったが、十種競技では5499点で頂点に立った。

また2年後の1997年の第12回大会は南アフリカのダーバンであり、86歳となった木村さんはM85のクラスへ。実に7種目に出場し、100m17秒43で3位、80mH24秒93で2位、300mH1分32秒92で1位。棒高跳1m40と三段跳6m53は共に2位。砲丸投7m51で2位、ハンマー投16m70で5位と、年齢を感じさせな



「ロマン」と書かれたハチマキを巻いてハードルを跳ぶ木村さん

●木村喜三さんのクラス別世界・日本記録

クラス	種目	記録	年齢・樹立年
M80	走高跳	1m22	(83歳・1994年)
	100m	16秒44	(85歳・1996年)
	200m	35秒82※	(85歳・1996年)
	80mH	18秒06※	(85歳・1996年)
M85	走高跳	1m20	(85歳・1997年)
		1m18※	(85歳・1996年)
	棒高跳	1m75	(85歳・1996年)
	走幅跳	3m51※	(85歳・1996年)
	三段跳	7m44	(85歳・1997年)
		7m18※	(85歳・1996年)

※は世界記録

いたフサを見せた。

「スポーツマンにスタミナ源は欠かせん」と、母親の教えから栄養のバランスを大切に。整腸のためにヨーグルト、血行を良くするためにきな粉を欠かさず口にした。

食事以外で毎朝励行したのが床の上での手足の屈伸。腹筋、背筋を鍛えたほか、腕立て伏せを100回。競技場での練習は週2回ほどの割合だった。M85クラスで新記録を量産した木村さん。今はその雄姿を見ることができない。

世界に誇れるトリプルジャンパー 大日向暁子さん(70歳・長野)

日本マスターズ的女子アスリートとして世界に誇れる存在の大日向暁子さん(70歳・長野)。別表の通り、W45～65までの5クラスの三段跳で世界記録をマークしているのだ。

長野・松商学園時代は走幅跳をやっており、高3の1966年青森インターハイで5m66を跳んで、高校一になっている。進学した日大では、3、4年でインカレ5、4位に入賞の実績を。

この大日向さんが長いブランクの後、40歳からマスターズに登場した。「マスターズは40歳から参加できる、と聞いていたので、40歳まで待っていました」と言うが、当時の規則は『女子は35歳から』となっていた。大日向さんがこれを知ったのは後年で、非常に残念がった。

大日向さんがマスターズに打ち込むようになったときは、公務員の仕事と主婦業を両立し、練習時間はかなり制約されていた。1994年、44歳のとき、愛知県国体予選で12m14のW40クラスの日本記録をマーク。年齢的に不利な壁を破ったまでは良かったが、この後、右脚の靭帯じんたいを痛めた。

それでもくじけなかった。次年の第16回全日本マスターズの神奈川大会で、さらなる活躍をした。クラスは上がってW45。171cm、51kgのスマートな体を躍動させ、走幅跳で5m52

の世界タイ、三段跳で11m65の世界新を樹立した。

痛めていた右脚については「気にしていません。三段跳はマスターズになってから始めましたが、難しいですね」と笑顔で。世界新はこの大会だけではなかった。同年の三段跳のベストは11m98で従来の世界記録を7年ぶりに87cm更新した。

東京五輪の合宿を見て 陸上への情熱を燃やす

大日向さんが陸上への情熱を持ったきっかけは、高校生のときだ。1964年東京五輪の有力候補たちが、大日向さんの住む松本市で合宿を行った。大日向さんは選手たちが練習している競技場に足を向けてみた。そこで感動を覚えたのだ。

「やはり五輪代表を狙うような選手の動きは違いましたね。特に目を引いたのは依田郁子さんでした。胸が躍る思いで見えていました」そうだ。依田選手は東京五輪の80mHで5位に入ったほどの実力の持ち主だった。このときの感動がインターハイの走幅跳Vにつながったのかもしれない。

大日向さんが全日本マスターズで、女子優秀選手に選ばれたのは、第13、26、27、31回大会(1992～2010年)の4回。大会で最も活躍した選手に与えられる織田賞(MVP)が創設されたのは第16回大会(1995年)からで、受賞第1号になったのが大日向さんだ。以後、第22、23回大会と、3回受賞している。

ちなみに40歳で初参加した第11回全日本マスターズ(1990年)のW40・走幅跳は5m25のトップだった。脚の故障には、その後も泣かされた。

「お医者さんには随分お世話になりました」と、故障と闘いながら競技を続行。「これからも自分自身に合った練習をして、地道に競技を続けます」。

2020年はW70クラスの年齢となり、W70クラスの記録を狙うチャンスだったのだが、新型コロナウイルスの流



三段跳のレジェンド、大日向さん。大会が再開されたら、W70を舞台に活躍が期待される

行で競技会がなくなった。「本当に残念です」と一言。そこで8月10日に仲間たちと勝手に記録会を行った。

大日向さんは、三段跳で9m30～9m40。W70の公認世界記録は8m65で、それを上回った。が、記録は非公認。「早く競技会に出たい」とその日を待ちわびている大日向さん。その瞳は輝いている。

●大日向暁子さんのクラス別世界・日本記録

クラス	種目	記録	年齢・樹立年
W40	三段跳	12m14	(44歳・1994年)
	走幅跳	5m52※	(45歳・1995年)
W45	三段跳	11m98※	(45歳・1995年)
	走幅跳	5m14	(54歳・2004年)
W50	三段跳	11m66※	(54歳・2004年)
	三段跳	10m97※	(56歳・2006年)
W55	60m	8秒90	(60歳・2010年)
	三段跳	11m04※	(60歳・2010年)
	走幅跳	4m18	(65歳・2015年)
W60	三段跳	9m81※	(65歳・2015年)
	立五段跳	11m67	(69歳・2019年)

[室内]

W65	三段跳	9m86※	(67歳・2017年)
-----	-----	-------	-------------

※は世界記録